



心の座標軸 「日本」



永山 妙子
成都天府ソフトウェアパーク
日本商務代表



中央、ミルトン・フリードマン博士、左、同じく著名な経済学者で、ご夫人のローズ・フリードマン（かの“選択の自由”はご夫妻の共著）。右、筆者。
(1978年9月)

「日本の経済政策はどうも矛盾しているようだね、妙子」とノーベル賞経済学者ミルトン・フリードマンが言う。写真は、70年代、香港ビクトリア湾チャーター船上での対話である。当時勤務先だった米銀の仕事仲間としての対話であり、20代30代の小娘にとって、日本のモノサシではあり得ない（許されない？）、世界の超VIPとの対話だった。

米国カルチャーゆえの、性、年齢差別無しの“当然”は、その後も日本の経済民度の高まりを背景に回を重ね、対話の相手は、デイヴィッド・ロックフェラー、ロバート・スティーヴン・インガーソル、ウィリアム・マクダナーNY連銀総裁、ビル・クリントン元大統領と続いた。そうした場で必ず期待されるのは“自分の意見”を明言すること。沈黙は金ではなかった。都度、肝を冷やしながらかも目いっぱい背伸びをし、そのうちそれが当たり前になった。こうしたチャレンジの積み重ねが、いささかなりと

も私のグローバル思考を育ててくれ、米銀仏銀の国際金融のキャリアで40数カ国の人々との邂逅^{かいこう}に恵まれた。

振り返ると「充実したキャリア」と「いばらの道」との感慨が交錯する。「日本で一番活用されていない資源は女性」との時の宰相の言葉を一步遅れの追い風と複雑な思いもする。思えば「貴方の力なのではありませんよ、日本の諸先輩方のご苦勞が、舞台を築いてくださったのですよ」と、母のこの戒めの言葉が私の心に「座標軸日本」を定めてくれたのだった。

“失われた20年”、繁栄期知らずの若者たちは気の毒という声も聞く。それをいうならオイルショック、ニクソンショック、日米貿易摩擦もあった。時代時代のチャレンジは常にある。グローバル化した試練に向かい、今の若者の心の座標軸はいかなるものなのかとの思いしきりである。